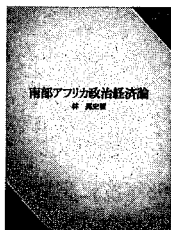


アジア経済研究所★新刊紹介



林 晃史著

南部アフリカ政治経済論

1999年 299p.



早瀬保子著

アフリカの人口と開発

1999年 269p.

初めて表紙をめくった書物が著者の出版物だったというアフリカ関係者は非常に多い。かく言う評者も学生時代に星・林著「世界現代史13 アフリカ現代史I」(山川出版社 1978年)を通してアフリカと出逢った。

本著は著者の30年以上に及ぶ精力的な南部アフリカ地域研究の集大成である。冒頭で著者は、アパルトヘイト期に南アフリカ政府に留学を拒否されたために東アフリカ研究に割いた5年間以外、一貫して南部アフリカ情勢を追ってきたとその研究半生を振り返っている。

「南ア共和国研究の過程で……共和国と周辺諸国の関係がいかに密接であるかが分かり、南部アフリカ全体に目を向けるようになった」とまえがきに述べているように、著者はアパルトヘイトの萌芽から確立、そして崩壊と、南アフリカに流れる時間軸に視座を置き、南部アフリカの植民地化、内陸開発、民主化、南アフリカとの関係、ポストアパルトヘイトを分析してきた。長年の研究蓄積をまとめて、最近の欧米、現地および日本における研究成果を加味しており、過去の南部アフリカ研究に関する議論を短時間で把握できる、関係者にとっては必携本である。

章立ては、第1章 南部アフリカの特徴、第2章 南部アフリカ諸国の政治的民主化、第3章 南アフリカ共和国のアパルトヘイト体制の崩壊と民主化、第4章 南ア経済発展と南部アフリカ諸国の従属化、第5章 南部アフリカ地域機構の順となっている。

著者ならではのとも言える694におよぶ詳細な脚注は評者を含めた後学への贈り物でもある。

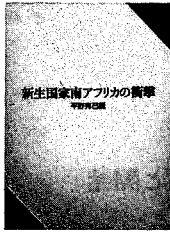
(編集委員会)

世界人口は1999年に60億人に達する。世界の人口増加率が70年代後半より低下している中で、ひとりアフリカのみ高率を持続している。アフリカにおいて高出生率による人口急増は、食糧問題、雇用問題のみならず、水不足、森林破壊や土壌の悪化など環境破壊の問題を深刻化させている。さらに、冷戦構造の終焉後もむしろ拡大ないしは激化の様相させみせる内戦とそれによる難民の増大、マalariaおよびエイズなどの感染症や寄生虫症に対する膨大な負担などの難題が山積している。

高い人口増加率がこのまま続けば、20数年後にアフリカの人口は倍増し、抑制のスタートが遅れるほど問題は深刻化することになる。アフリカ人口問題の解決には、経済の安定、そして生活水準の改善が必須であるが、高出生率を支持する伝統的な宗教、文化、家系の持続性への高い価値、さまざまな慣習に束縛されるジェンダー問題などにも取り組まねばならないであろう。

本書は、アフリカ人口問題の入門書として書かれたもので、人口急増の背景、人口構造、出生、死亡の動向と要因、将来人口予測、教育水準、就業状況、ジェンダー、人口政策と家族計画、都市化とその要因、国際移動と難民の状況が紹介される。本書はアフリカ諸国の人口問題の多様性、それを引き起こす種々の要因や背景などが、用語の解説や人口分析の基礎的方法、最新情報から作成された図表などを含め、一般読者が利用しやすいように編集されている。

(編集委員会)



平野克己編
新生国家南アフリカの衝撃

1999年 262p.



池野 旬編
アフリカ農村像の再検討

1999年 254p.

日本における南ア研究は、専門を異にする複数の研究者が集まって議論を重ね、彼国学界の動向を意識しながら問題意識や分析手法を吟味し、文字どおりの共同研究成果を蓄積していくという、きわめて生産的な時代を迎えている。現地情勢のダイナミックな展開が旺盛な研究意欲とそれに対する需要を生み、優秀な若手の登場が新たな視角の導入と分析手法の開発を可能にしているのである。本書が、当所研究双書シリーズには珍しいアフリカ一國研究となっている背景がここにある。

第1章「総論：「アフリカン・ルネサンス」が意味するもの」（平野克己）に続いて、第I部「外に向かう衝撃」3論文——「新生南アフリカの外交政策」（佐藤 誠）、「新生国家南アフリカ対アジア経済関係の変容とその意味」（須藤裕之）、「新生南アフリカと南部アフリカの小国」（望月克哉）、第II部「内に迫る衝撃」5論文——「新生南アフリカと「市民社会」（civil society）」（遠藤 貢）、「新生南アフリカの非営利セクター」（牧野久美子）、「新生国家南アフリカとインド系人社会」（小野達郎）、「南アフリカにおける企業社会の趨勢とアフリカン・ルネサンス」（西浦昭雄）、「南アフリカにおける大量失業問題の産業構造論的分析」（平野克己）がある。

経済力、軍事力、国際的発言力。どれをとっても近隣に並び立つものがない、アフリカ大陸における孤高の地域大国南アフリカ。この国に切り込んでいくときの方法は、したがって、従来のアフリカ研究手法をどこかで飛び越えなければならない。南ア覇権についての考察、アジア諸国との貿易財解析、市民社会論的問題提起に関する洞察、多民族複合社会、企業研究、産業構造論。創意に満ちた本書の挑戦は刺激的である。うち幾つかは、別書に編まれて、近々南アフリカでも出版される予定。

(編集委員会)

本書は、アジア経済研究所が1997～98年度に実施した、アフリカ農村に関する研究会の成果である。内容および執筆者は、東アフリカの土地制度（吉田昌夫）、タンザニアの水利組織（池野 旬）、ザンビアの土地問題（児玉谷史朗）、ガボン農村における「脱農民化」（武内進一）、ポリティカル・エコロジー論とアフリカ農村（島田周平）である。各論文では、アフリカ農村の複雑で多様なあり方が、フィールドワークの成果をもとに論じられている。

本書の大きな特徴は、執筆者がいずれもアジア経済研究所のOB、あるいは現役の研究所スタッフである点にある。したがって本書を一読することにより、アジア経済研究所におけるアフリカ農村研究の特徴と方向性を見ることができる。そしてそのような特徴の一つは、アフリカ農村の実態を現地調査で明らかにしつつ、これを国家レベルでの動向に結びつけて論じるという態度であろう。この困難な課題に、本書の執筆者はそれぞれ独自の視点をもってチャレンジしている。

本書のもとになった研究会での議論の中心は、アフリカ農村を研究対象とする場合の既存の分析枠組みや概念に対する批判的な検討であった。しかし編者が「まえがき」で述べているように、本書でもアフリカ農村の多様で複雑な実態を総合的にとらえる新たな分析枠組みや概念を提示するまでには至らなかった。既存のアフリカ農村像を再検討する必要があるという共通認識のもとに、それぞれの執筆者が独自のアプローチによりこの問題に迫ろうとした結果が本書である。今後の事例研究と理論研究の積み重ねの中で、本書の問題意識が継承されていくことを願いたい。

(編集委員会)